

四旬節第1主日

第一朗読 創世記 2・7-9、3・1-7

第二朗読 ローマ 5・12-19

福音朗読 マタイ 4・1-11

2026.2.22 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今、わたしたちは四旬節を通して、節制——自分自身の生活を振り返ること——の中で何が大切かっていうのを改めて意識する、そういうことのために節制っていう、ある意味では信仰生活から心をそらしてしまうような活動を控えるという、そういう呼びかけのもとに、この四旬節を過ごしていますけれども、わたしたちが信仰をいただいた大きな目的は、一人ひとりが神様からいただいた自分自身をより良く生きるためです。誰か他の人のように振る舞うということではないんです。

わたしたちは、信仰の模範としていろいろな聖人たちを教会の歴史の中に神様からいただいているわけですが、そういう聖人たちを見倣うことは大切であると同時に、しかし、そういう聖人たちのように——でもちょっと足りない——そういうような者にならなければならないということではないんです。一人ひとりの中にそれぞれ神様が与えられた恵みがこめられている。それを見出し、そして良く生きるっていうのが、信仰の目的なんですけども、自分自身を生きるという言葉の中に——これは信仰生活以外でも、世の中でも使われる言葉かもしれませんが——注意しなければならないのは、同じ言葉でも意味していることが違う可能性があるということです。

自分自身を生きるというのは、信仰の生き方からすれば、決して自分の中にある欲望とか感情のおもむくままに生きるということではないわけです。それも自分の中から出てくるもの。しかし中から出てくるいろんな思いや感情とか——あるいは欲望も含めて——っていうのは、外の世界からの影響にさらされていることは当然なわけです。欲望だっていろんなもの——コマーシャルなんかは一つのはっきりした例ですけど——に刺激されている。そういうような中に置かれて右往左往する、というのが自分自身を生きることでは決してないはずなんだっていうのが信仰の考え方です。

自分の中から出てくるいろんな思いや欲求、望みというものを見極めて、何が自分を生かし、何が自分を生きられないように、生きにくくしているのかということを見分けていく。そして生きることができる良いものを選び取っていく。そういう意味での自由、それが洗礼の時に約束する神の子の自由ということになるわけです。決して、自分の中の思い——感情や欲望——に振り回されるというのは自分自身であるということではないんだ。

そういう意味で、自分を支配する、それが神様から一人ひとりが与えられた人生の課題なんですけども、それが本当にある意味では難しいので、そこから目をそらして、^{たしや}他者があるいは周りを、場合によっては神様自身を、支配しようとする。それが悪の誘惑だと言えます。

今日の福音の中でイエス様を誘惑しようとしている悪魔は、石をパンに変えるように、あるいはこの繁栄を手に入れるように、また神を試すようにって言う。それは、物質や他の人、そして神様さえも自分の思い通りに動かそうとするっていう、そこへ引っ張っていかうとするその力を個別的な形で表していると書いていいと思います。

そういう外側を支配しようとするっていう誘惑に屈してしまうのがなぜかと言えば、わたしたちが自分自身を支配することが難しい、あるいは自分自身を生きることが難しいという無力感を心の中では感じていながら、その無力感から目をそらしたい、そういう気持ちが悪魔がつけ入る隙ということなんじゃないかと思います。

そういう意味で、キリスト教的な神の子の自由、あるいは今日の第2朗読の言い方を言うならば、「神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです」(ローマ 5・17)。何を支配する？ 世界？ 違いますね。自分自身を、ですね。

もっと簡単な言い方をすれば、状況や人のせいにする生き方をやめるってことです。人のせいにして、そして自分を被害者としての立場からものごとを見ていくっていう、そういう意味ではいろんな状況や周りの人から支配されるっていうことから自分自身の自由を、そういうような当然不完全な世界、不完全な人々と共に生きる中であって、その中から良いものを選び取っていくには、わたしたちは自分自身を神様

の恵みによって生きる、自分自身の中にある、出てくるものをコントロールしていく、見分けて支配する必要があるわけです。

よく聞く[有名な祈り](#)で「変えることができるものを変える勇気を、変えることができないものはそのまま受け入れる心の平安を、そしてその両者を見分ける知恵を与えてください」——皆さんも聞いたことがあると思います。変えることができるのは、わたしたち自身の自分との向き合い方なわけです。変えることができないのは、周りの人たち。だけどもしかしたら良い影響が伝わって変わるかもしれない。でもわたしたちが変えようとするわけではないわけですね。そしてそれを見分けていく中で恵みに出会っていくというのが、荒野においてさえも神様は恵みを与えられる——荒野って一見するとこう得るものがないように見える。しかしそこでさえも生きることができるというのが、イエス様がこの 40 日の間わたしたちのために示されたその生き方であるということができると思います。

今日、四旬節にあたり洗礼志願者をお迎えするわたしたちが、洗礼志願者と共に、イエス様に導かれて一人ひとりが神様からいただいた自分自身をよりよく生きることができるよう、振り返りと決断の恵みを願いたいと思います。

参考 ラインホルド・ニーバーの祈り（短文）

https://www.pauline.or.jp/prayingtime/vari_rein_short.php

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>